コラム ～日本の健康・世界の健康～

プライマリ・ヘルス・ケア

名古屋市立大学大学院看護学研究科　国際保健看護学　教授　**樋口　倫代**

今年は「アルマアタ宣言」（1978年９月12日）から45周年でした。

アルマアタは地名です。現在のカザフスタンにあり、今はアルマティと呼ばれています。45年前にそこで、世界保健機関（WHO）とユニセフの共催によるアルマアタ会議という国際会議が開催され、宣言が出されました。当時のWHO加盟国のほとんどである143カ国と国際機関やNGOなど67機関が参加したと報告されています。冷戦中に、ソ連国内で開催されたという点でも画期的だったようです。

会議では、「すべての人が健康になるにはどうしたらいいのか？」が話し合われ、プライマリ・ヘルス・ケア（Primary Health Care、以下PHC）がその戦略として打ち出されました。

アルマアタ宣言は10章から成っています。1章は、健康は基本的人権であることを「再確認」しています。第二次世界大戦後の1948年、WHOが「健康」の定義を公表し、健康を享受することはすべての人にとっての基本的人権であることを世界中で確認しました。それから30年、この基本的人権がすべての人には守られていない当時の現状がアルマアタ会議の背景と言えます。２章は、先進国と開発途上国の間や、それぞれの国内に存在する健康の不平等について「*政治的、社会的、経済的に許しがたいほど大きい。*」と強い表現で述べています。

第二次世界大戦後、医学・医療技術は飛躍的に進歩しました。一方、戦後からそのころまでに多くの国が独立し、経済開発、社会開発が行われました。冷戦下ということもあり東西陣営は、独立した国々など開発途上国にさかんに開発援助をしたそうです。その一環として、開発途上国にも大きい病院が建てられ、近代的医療従事者の養成が行われました。それなのに、その恩恵を受けているのはごく一部の人たちだけ…そんな状況があったようです。

３章は健康における経済・社会開発の役割を、４章は個人の役割を述べています。個人は、健康に関わる計画と実践に参加する権利と義務を有しているとしています。そして、５章で「2000年までにすべての人に健康を」という目標とPHCがそのための鍵であることを示しています。

PHCとは何なのかについては６章に書かれています。「必要不可欠なヘルス・ケアである」に続いて、どのようなヘルス・ケアかを修飾するフレーズをどんどんつなげて説明しています。この長い文章を、とてもわかりやすく紹介しているすぐれた日本語訳はたくさんありますが、ここではあえて箇条書きにしてみます。

- *実際に役に立ち、科学的根拠があり、社会に受け入れられる方法と技術に基づいている*
- *その方法と技術はコミュニティの個人と家族にとってあまねく利用可能である*
- *十分な住民参加によって行われる*
- *いかなる開発段階でもコミュニティと国が維持していけるコストである*
- *自信と自己決定の精神に則っている*

さらに、「*人びとの生活の場や職場にヘルスケアをできるだけ近づけ、継続するヘルスケアプロセスの第一歩となるものである。*」としています。

引き続き７章で、PHCに必要とされることを７項あげて説明しています。特に、地域と住民の参加、資源の有効活用と適正技術の使用はPHCの重要な原則とされています。また、保健分野だけでなく、農業、畜産、食糧、工業、教育、住居、公共事業、通信、など多くの分野との協調を求めているのもPHCの特徴です。具体的活動としては、健康教育、食糧供給と適切な栄養の促進、安全な水の供給と基本的な衛生、母子保健、予防接種、地域で流行している感染症の予防と対策、よくある疾患やケガの治療、必須医薬品の供給を含むとしています。

宣言から少し外れますが、アルマアタ会議を牽引した一人とされる当時のWHOのトップ、マーラー医師は、その３年前に行った講演で、人びとが医療技術に必要以上の依存をするようになってしまったことを指摘しています。そして、医療技術は医学的に効果が証明されている必要がありますが、それぞれの状況にふさわしいものかどうかも吟味されるべきだ、と説いています。当時下痢による脱水は子どもの主要死因の１つでした。その治療として経口補水液が有効であることは証明されていました。それでは、「補水センター」のような施設を建てて、医療スタッフを配置すればいいのか？―「*各家庭の母親たちが手に入れられるような補水塩を作る方が役に立つ*」、「*下痢が起こることにも、その治療にも何の秘密もない*」―これは、PHCの原則を端的に説明していると思います。

宣言に戻ると、８章で各国政府の責務、９章で国際社会の責務を示し、結びの10章で世界に行動を呼びかけています。結びでは、世界の資源が軍備や軍事紛争に使われていることにも触れ、平和や軍縮が健康のための資金を生み出すことができるとまで言及しています。PHCは、社会生活における健康の重要性と、それを実現するための健康を中心とした社会システムの構築を求めており、保健政策や理念にとどまらない、ひとつの社会思想であるとも言われています。

アルマアタ宣言から45年が経過しました。７章に示されたPHCの具体的活動内容では、母子保健や感染症に焦点があたっていますが、現在開発途上国も含めて、健康の主要課題は慢性疾患や高齢化にシフトしてきています。この45年間で医療技術はさらに進歩しています。下痢による脱水に比べてはるかに複雑な疾患のメカニズムがどんどん解明されています。それでは、PHCは過去のものなのでしょうか？

当時から形を変えてはいても、健康の不平等の問題、医療技術への過剰な依存の問題、保健医療コストの問題などは存在し続けています。そして、それらと少し別の視点となるかもしれませんが、アルマアタ宣言が健康への影響を指摘した平和は今も実現していません。

PHCは、今でも、もしくは今こそ、さまざまな角度から健康と社会のあり方を考える際に必要なのではないでしょうか。（文中の斜体は筆者訳）